



## サッチャーリズム下の階級・政治動向

J.ウェスターガード著

### 『イギリス階級論』を読む

濱嶋 朗

本書は、著者が一昨年冬に一橋大学で行った連続講義を訳出したもので、邦訳のタイトルは上記のようだが、原題は『1979年以降のイギリスにおける階級—事実・理論・イデオロギー』となっている。これは、1975年に出た『資本主義社会の階級』(H.レスラーと共著)の後編にあたり、70年代までとそれ以後というふうに出る時期はちがうけれども、同じ視座と手法で80年代の階級構造やそれをめぐる政治的・イデオロギー的状况を簡潔に解明したものである。一言でいえば、原題が示すように、70年代までの比較的安定した政・労・使の政治的妥協形態であるネオ・コーポラティズムが79年以降の保守党支配に変わり、サッチャーリズムといわれる新保守主義的政策のもとで階級間の格差がひどくなる一方なのに、これを蔽いかくすイデオロギー(「無階級性」の幻想)がはびこり、現状突破への展望がなかなか開けない閉塞状況を、マルクス主義的階級分析の視点からとらえたものである。

こうした状況にたいして、著者は、イデオロギーによってではなく事実に即して論戦を挑み、階級否定の言説・イデオロギーを批判的に検討しつつ、その背後にある政治過程をえぐり出して、今後の展望を切り開こうとする。

第1章では、1979年の総選挙を転換点とする階級構造の推移が跡づけられる。労働党の敗退に代わる保守党急進右派政権のもとで、労組へのしめつけ強化、公営企業の民営化など私企業

のイニシアティヴ強化をはかる一方で、住宅・医療など福祉の一部切り捨て、直接税軽減と引きかえの公共支出の抑制などを強行する政策(サッチャーリズム)がとられた結果、所得や資産の配分における格差の増大、つまり貧富の差が深刻化し、分極化傾向がこれまでよりもいっそう強まった事実が、各種データをもとにあばき出される。第2章では、主としてイギリス社会学における階級分析のあり方が批判的に検討される。とくに60年代以降における経済の成長と消費水準の上昇を背景とする広汎な労働者階級の富裕化とそれにとまなう生活や意識の中流化をめぐる論議がとりあげられるが、ゴールドソープらによる「豊かな労働者」論でもその生活や意識の中流化や保守化にもかかわらず、労働者階級は健在だとされている点に言及する。なお、階級以外にも性、年齢、人種などによる差別(外国人労働者や女性、老人たちが概して下層に位置づけられる事実)への論及もあるが、著者がジェンダーの問題を階級分析と関連させて重視している点は注目されてよい。この点はあとでふれよう。

ところで、サッチャーリズム下の階級構造やそれをめぐる政治的・イデオロギー的状况としてとくに注目をひくのは、以前よりも深刻化する分極化傾向を象徴するかのよう、底辺を構成する「アンダークラス」が脚光を浴びる反面で、頂点を構成する「トップクラス」があまりにばかされ、両者の中間をなす膨大な層(い

わば中間大衆)の無階級性の背後におおいにかくされているという事態であろう。この点の解明は第3章で行われるが、これまでの記述がやや平板で新味にとばしいのにくらべると、かなりの熱気が感じられる。労働党凋落の原因究明ともかかわって、本書の読ませどころといえるかもしれない。

ところで著者によると、いわゆる「アンダークラス」論には右派的立場からする「道徳的墮落」説と中道ないし左派的立場からする「見捨てられた貧困」説との二つが区別される。前者は、最下層の人びとを道徳的墮落がもとで貧困におちいり、社会の残りの部分から切り捨てられた少数派とみなし、最下層への転落は小市民的徳性(勤労節約、独立自尊など)の欠落、いわば自墮落の結果であり、自業自得だとされる。後者は、80年代に増大した失業者・低位不安定就業者、母子家庭などの被保護世帯、最低限の年金生活者など、労働者階級から永続的に排除された生活困窮者をアンダークラスとみなす。いわばサッチャーリズムの犠牲者ということになろう。左右いずれの立場をとるにせよ、自墮落な落伍者であれ見捨てられた生活困窮者であれ、それらは社会のごく少数派にすぎず、残りの部分は「豊かさの増大を共有する無階級の多数派大衆」であり、その間に階級的断層はないから、古い階級的断断(ひいては両極分解論)はこんにちますます無意味になったとすることによって、両極分解ないし窮乏化の事実を故意にゆがめ、あるいは否定して、現状を肯定し正当化するイデオロギーとして作用する点では大差ない。これにひきかえ、ひとにぎりのトップクラスに富と権力がますます集中している事實は、無階級の多数派大衆の背後にかくされてしまう。

このように、著者にとって問題なのは、80年

代のサッチャーリズム下の階級構造がするどく分裂・分断しているにもかかわらず、無階級の多数派大衆の精神状況が没イデオロギー的ないしは保守的なムードにどっぷりひたっているという、鋭いコントラストにはかならない。そこから、なぜそうなのか、が問われざるをえない。いいかえるならば、「即自的」階級分裂が尖鋭化しているのに、なぜ「対自的」階級分裂が色あせてしまったようにみえるのか、といったマルクス主義階級論の根幹にかかわる問題に著者は直面せざるをえなくなる。

この問題は、これまで大衆社会論や脱工業化社会論、イデオロギー終焉論や豊かな労働者論などによってくりかえし問われてきた問題であって、とりたてて新味はない。即自的階級から対自的階級への発展ではなく、即自的階級状態への退行・固着は、労働者をふくむ無階級の多数派大衆の体制内編入による労働党離れとしてあらわれる。著者によると、その原因は、(産業・階級構造の変動などの経済過程以外に)、労働党の政権担当能力の貧困さ、階級的妥協のうえに立つ改良主義への埋没、コーポラティスト政策の失敗、不毛なストライキの頻発による混乱など政治過程に求められる。一言でいえば、それは階級闘争の制度化に対応する「階級政治の制度化」に起因し、とりわけ無階級の多数派大衆というマージナルな浮動層(とくに現場監督者、下級技術者、職員など)における労働党への幻滅と保守回帰、政治への無関心と不参加をともなっていた。そうした事情が労働党の凋落をもたらしたことはたしかであろう。ただ、マージナルな浮動層をふくむ労働者層のかなりのものが、なぜ保守党や中道政党に投票したのかは、ここからただちに説明できないように思われる。いま一歩立ち入った分析が望まれる。

なお、マージナルな中間層の動向を占ううえ

## 書 評

で、下級ホワイトカラーのかなりの部分を占める女性職員や兼業主婦（パートタイマー）の動向を著者が注目している点は興味をひく。というのは、彼女たちがキャリア組の男性と結婚しているばあい、「ほどほどの階級的混合」結婚が、「階級の経済的分断の先鋭化を政治的にガス抜きする」効果をもたらるからだ。ブルーカラーの男性と結婚する（交差階級的な）ケースも多いので、効果のほどは確認する必要があるだろうが、それ以上に強調しておきたいのは、このような意識や行動の根底にある「階級の経済的分断」が女性の労働市場への大量参入によって温

存され隠蔽されている事実である。階級分解と性別階層分化とを統一的に把握する立場を推し進めていたら、著者の分析や主張はもっとアピールすることができたにちがいない。いずれにせよ、本書が提起した問題はイギリスだけではなく、総保守化への傾斜を強めつつあるかにみえるわが国の状況にとっても、他人事ではない重要な示唆をふくんでいる。その意味で、小冊子ながら大いに参考になるであろう。

（渡辺雅男訳、青木書店、1993年12月刊、2266円）

（帝京大学教授）

久保新一著

## 『戦後世界経済の転換——ME化・NIES化の線上で』

五木 武利

本書は全9章からなり、対象範囲も日本、西ドイツ、アメリカ、韓国、台湾、香港、シンガポールと、今日の世界における問題地域をほぼカバーした、文字どおりの「戦後世界経済」の解析を試みた大著である。また久保氏の1986年から1993年のあしかけ7年にわたる研究成果を集大成した著書でもある。ちなみにそれは章だてをみれば一目瞭然である。

- 第1章 ME化・NIES化の分析視角
- 第2章 冷戦体制解体の力学と日本・東アジア NIES—アジア的基盤におけるME化の受容と展開
- 第3章 アメリカ産業のリストラクチャリングと「空洞化」—鉄鋼・自動車・ハイテク産業中心に
- 第4章 西ドイツ産業危機とME化

- 第5章 転換期の台湾経済における輸出加工区とME産業
- 第6章 転換期の韓国経済とME産業
- 第7章 香港とシンガポールのME化・情報化
- 第8章 1980年代における日本のME化・情報化
- 第9章 冷戦世界経済の性格と分析視角

本書は冷戦体制を座標軸とし「1967年（アメリカ—評者）デタント路線への転換と、1971年（アメリカ—評者）貿易収支の78年ぶりの赤字転落に示されるIMF体制の破綻」（ii頁）を画期として、その冷戦体制は解体過程、「冷戦の第二ラウンド」にはいる、としている。そして「この第二ラウンドの展開基軸であると同時に解体基軸となったME化と日本・NIESに焦点をあて、その分析を通して興隆の原因と特質を探り、